



「教育は〈想像する力〉の乏しさを克服する手段」だと語る

# いのぐち 猪口邦子さん

(上智大学法学部教授 前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使)

インタビュー／宇田夏苗 撮影／つちだ耕平 12

良い点を取り、良い学校に進むことが  
教育の目的ではなく、  
子どもたちには能力を高めることで、  
社会の中で困っている人に  
寄り添うことができることを  
伝えていかなくはなりません。

国際政治学の教授職から軍縮大使、区の教育委員に至るまで、  
さまざまな現場で活躍する猪口邦子さん。彼女に学問の扉を  
開いてみせたのは、「女性が能力に応じて職を得る時代」に希  
望を託し、自らの情熱を授業に込めた高校の先生だった。

## 学問の本質を知った高校の授業

学問の道を志そうと思ったのは、高校時  
代の担任だった先生との出会いがきっかけ  
です。父の仕事の関係で、子ども時代をブ  
ラジルで過ごした私が、日本に帰国してか  
ら入学した学校（桜蔭学園）の赤星秀子先  
生で、後に桜蔭の校長を務めた方です。

文学者のような、素晴らしい国語への感  
性を備えていた赤星先生の授業は、大学の  
講義を超えるような水準のものでした。も  
うひとり世界史の高田弘子先生。常に物  
事を因果関係として捉え、概念化していく  
といった授業を進めてくれたのです。それ  
は数多の具象を抽象化し、概念化する訓練  
でもあったわけですが、それこそが学問の

## Interview スペシャルインタビュー

本質なんですね。このような先生方の授業  
を通して、私はごく自然に学問に接するこ  
とができました。

15歳から18歳ぐらいの多感な時期を過  
す人間にとって、何よりも説得力を持つの  
は、その人のプロとしての水準です。その  
年代は、不思議なほどに、鋭く物事の真贋  
を見抜いてしまいます。その後、その人が  
権力の座についているから、などといった  
観点で人を見るようになって、目が濁って  
しまうのはなぜなのかと思いますね(笑)。

赤星先生の授業に説得力があったのは、  
その内容が、おそらく日本一だと納得する  
のに十分なものだったからです。そのため  
生徒たちは「これほどの内実をお持ちなの  
に、なぜ私たちを教えてくださったっているの  
だろう？」という疑問を持ち、多くのこと  
を理解するようになりました。

私が高校で出会った先生の大半は、明ら  
かに、大学で教鞭を取れるほどの優れた学  
識と洞察を備えていました。それにもかか  
らず高校で教えていたのは、当時、女性  
には教授職への道がまだ十分に開かれてい  
なかった、という背景があったからだと思  
いました。

## Special Interview

そうした時代に学問を志した先生方と、その思いを積極的に受け止める女子生徒たちとの、深い思いのある時間が教室の中に存在していたのです。それはまるで「女の子よ、志はあきらめな」という、暗黙のメッセージが込められたバトンを手渡されるようなものでした。そのバトンを受け取りながら、私たちは能力に応じて、平等に女性も職を得ることのできる時代を展望したのです。最初に接した「職業婦人」が桜蔭の先生方でしたから、学問の世界に生きる女性の姿を深く見た、それが私の現在の仕事につながっているのだと思います。

### イメージへ想像する力の大切さ

私は教育というのは、イメージ（想像）する力の乏しさを克服する手段、だと思います。人間は経験した以上のことを考える力が乏しくて、それが人間の根本的な能力の弱さなのです。言い換えるなら、私たちは具象の世界に生きているということなのでしょう。でも、自分とは異なる状況にいる人に寄り添い、助けるためには、彼らのことを想像する力が必要で、そうした力をつけるために教育があるのです。

### 子ども学生の中にも光を発見する

平線が見えてきます。そこから、自分が悩んでいることに対する耐久力も出てくるかもしれません。

大学でゼミを開講する際、私は試験を行わずに、希望した学生をすべて受け入れています。人数が多くなると難しくなる面はありますが、教育はすべての人に開かれているべきだと考えているからです。

希望者全員をゼミに入れると、いろんなタイプの学生が入ることになるのですが、それがゼミを活性化してくれます。あまり学問に関心を持てなかった人もいれば、コンパの仕切りがうまい人もいます（笑）。そうした中でお互いの良さを認識し、評価し合う、というのがゼミの場なのです。

今の子どもたちは、偏差値での上下関係を意識して育っているのです。誰にでも見るべきところがあるという観点を持ちにくいし、それを養う機会もないのです。学生たちにはゼミの中で、お互いの能力を発見する力を養ってほしいと思います。

子どもというのは成長過程でいろいろなプロセスがありますから、ある時不調で

子どもたちの想像力を育てるには、まず自分の状況を超えて、他人を想像できる能力の大切さに気づくことが重要です。アフリカで飢餓に瀕している子どもを想像するだけでなく、教室の中で、自分とは違う問題を抱えている友だちが、何を感じているかを考えることはできるはずなんです。それが想像する力をつける訓練になるのです。



「いっしょに働く人に無駄な労力を使わせない」のが仕事上でのモットーだと猪口さんは語る。

も、むしろそうした時にこそ、飛躍する能力が培われることがたくさんあるわけです。子どもの本当の能力というのは表面的にはわからないものなのです。

私も学生時代に友だちから、「人をまとめるのがうまい」と指摘されて驚いたことがあります。小児ぜんそくがひどかったので、外で遊ぶこともままならず、本の世界に生きている文学少女でしたから、そんな自分の一面に気づいていなかったのです。中学生ぐらいまではどちらかというとシャイで、将来、外交官になるなんて夢も思いませんでした。

他人からの一言で、初めて自分の価値ある部分に気づき、人生に前向きになることがあるでしょう。だからこそ、友だちや保護者、地域の人たちが「あなたのこういうところが素晴らしい」と言ってあげることが大事なのです。

実は、大学で教え始めた最初の10年間は、私もゼミの選抜試験のようなものを行っていませんでした。その時期は教師として未熟だったので、できる子をゼミに入れなければきちんと教えることができないし、その子を花開かせることは不可能だと思ってい

も、未来の国際社会の縮図がありました。そこを充実したものにすることができなければ、より現実的な社会に出た時、効果的な政策を講じることができません。その点が見落とされると、空疎な国際化論になってしまいます。コソボの子どもについての想像できても、隣にいる友だちへの思いやりがなければ意味がないのです。

想像する力をつけるために、たとえば、被害者の声を聞くことも助けになります。私が国連小型武器会議で議長を務めていた時、小型武器の被害者の方に「どういう形でもいいから、みんなの前で訴えてください」とお願いしたことがありました。それは被害者が訴えることで、議場での外交官の能力の乏しさが補われるからです。

身体的な被害だけではなく、世の中にはいろいろな意味での被害を受けた人がいます。もちろん、そうした人たちが、辛かったことなど語りたくもない、と言うこともあるでしょう。でも、絶望の本質を知っている人間が声を上げることで、大勢の人が想像する力を得ることができるようです。

被害者の声を聞くことで、自分の小さな世界のバリアが取り払われ、より大きな地

ました。今ではどんな学生の中にも光を発見し、必ず成功させていく自信が持てるようになりました。教師としてプロになったということでしょうね。

### 近ごろ習熟度別指導についての議論が

近ごろ習熟度別指導についての議論が盛んになっていますが、私は技術的には取り入れてよいと思います。ただ、習熟度が高い人ほど、誰かの役に立たなければならぬのだと、子どもたちに伝えることが課題です。たとえば、数学が得意な子は、何かの問題でつまづいている子に、どうやってうまく教えてあげられるかと考え、その経験を積む必要があるのです。そうでなければ、たんなるエリート教育になってしまいます。

教師としては、いろいろなことをつまづいている子どもたちに、標準を合わせることで、子どもたちに対して、人間としての正しい姿勢を伝えるサインになるのです。

ところが、教師自身が手間のかかると思う子を切り捨ててしまうと、それがいじめをやっている、差別している、というサインとして受け取られてしまいます。口先だけで「みんなを助け合いましょ」と言っ

## Special Interview

ところで、教師の姿勢がエリート主義に揺らいでいる時は、子どもたちはそれを感じ取ってしまうものです。

ハンディキャップのある人だけでなく、思春期の悩みであったり、人間には広い意味でのつまずきがあります。そういう困難や障害に直面している人に、表面的ではなく深い支援ができる、本当に人を助ける効果的な道を探り当てる能力を持つ、というのがエリートの本質なんです。

良い点を取り、良い学校に行くというのはあくまでも手段であって、それがどんな目的につながるのか、ということ子どもたちに伝えなければなりません。本当に立派な人は、一番大きなたまずきがある人のことを思い、助けることができる人間なのだと思えることが大切なのです。

エリートが困っている人を切り捨てていく社会は、もうこれからの時代は立ち行かないはず。私はそうした社会を続けていくと、どこかで大きなしっぺ返しを引き受けることになると思います。

現在、学校と教室、コミュニティ、国民社会や国際社会といった、あらゆる場面で格差が表面化しています。そうした流れの

で、周囲の人に伝わるのだと思います。

### 自分の生まれた国と社会を信じて

米国の同時多発テロ事件の半年後に、私は軍縮大使に就任しました。多国間主義は死んだと言われ、誰も外交を信じていないような時代です。そうした状況の中で、多



●プロフィール 1952年千葉県生まれ。上智大学卒業後、米国エール大学大学院博士課程修了、政治学博士Ph.D.。行政改革会議委員、地方制度調査会委員などを歴任し、2002年4月から04年4月までジュネーブ軍縮会議日本政府代表部特命全権大使。03年には軍縮会議（ジュネーブ）議長、国連第1回小型武器中間委員会議長として国連の舞台で活躍。同年、エイボン女性大賞受賞。現東京都文京区教育委員。著書に「戦争と平和」（東京大学出版会、89年吉野作造賞）、「政治学の新視点」（ポスト現代システムと日本の選択）（筑摩書房）など。新刊に「戦略的平和思考」（NTT出版）がある。

中で、調和のある人間社会を実現していけるかどうかは、恵まれた能力を持った人たちが、障害や挑戦に直面している人たちに、どのように意味のある支援をしていくかということにかかっています。そして、そうした支援が社会全体の底上げにつながっていくのです。

### グローバルゼーションの時代の生き方

現在、東京・文京区の教育委員を務めています。外交官をやった人間がなぜ区の仕事をやるのかと聞かれることがあります。でも、地域に関わるのは、私は当然のことだと思えます。自分の地元を大事にできない人が、より広い社会の中で発言していく資格があるはずはないのです。それは教室をないがしろにして、アフリカ子どもを思っても仕方がないのと同じことです。

グローバルゼーションの時代と言われる今、人々の共通の問題を認識し、対処の仕方を考える一つの出发点となるのは、地域社会なのです。そうした小さなところから始めていかなければ、遠くから津波のよう

国間で交渉する土壌が復活し、軍縮交渉が進んでいるのだという姿を世界に示そうと、他国に呼びかけていきました。

国連の議場では「すべての国にオーナーシップ、いわば主体性がある」と伝えることから、徹底的に全会一致を目指しました。小国や被害国は、「国連が自分たちの意見をくみとってくれたことはないし、国連の活動はやりたい人たちが箔を付けるためにやっているんじゃないか」と最初は信じてくれませんでした。

しかし、それらの国の意見をきめ細かく吸い上げていくようにしたところ、「自分のような小さな国にまで相談してくれた日本は真の大国だ」と、何度も言われるようになったのです。

私が国連で仕事を進める中で、「すべての国が重要です」と言ったことはありません。そんなことは当たり前のことなのです。言葉ではなく、行動を通して、多くの人々が真意を理解してくれたんですね。

私は自分が求められる場所で仕事をしていきたいと思っています。今は大学でフルに力を発揮していくつもりです。教育改革が叫ばれていますが、私は自分

に押し寄せる時代の変化に苦慮するだけで、喪失感や自信のなさが人々に蔓延してしまします。そうなる、国際的な流れに強い反発が生まれ、ナシヨナリステイックなところに社会全体がぶれてしまった可能性が出てしまうのです。

グローバルゼーションの時代だからこそ、地域社会を空洞化させずに、むしろそこに重点的な支援を与えていくことが、すべての人が自信を持って新しい時代を受け止めていくために必要なのです。

教育者であり研究者でもある私にとって、教育委員はともやりの仕事がある仕事です。教育委員会制度は行政から距離を取り、政治権力などに影響を受けずに、自立して教育が施せるようにという考えの下で、民主主義の中で考えられた制度です。この制度が曖昧になると、民主主義における教育の中立ということに危険が出てきてしまいます。そうした意味で、私はこの制度を非常に重視しています。

でもただ、「教育が重要です」と言うだけで、協力しなければ他人に伝わらないのです。人間の迫力というのは、その人の生き方、時間やエネルギーの使い方によっ

の講義を日本一の講義にすることが、一番の改革だと考えています。教育の現場でこそ、学生たちに何かを与えることができ、その現場を良くするのが改革だと考えて、より良い講義のために工夫を続けています。

エール大学で博士課程を終えた私に、指導教授が「合理的な選択をしなければならぬ」とアドバイスしてくれたことがありました。「エール大学の博士でも、あなたは日本で失業者になるだろう」と。米国にいれば東部の名門の大学で助教授になれるだろうから残るべきだ、と言われて本当に悩みました。でも、最終的に、「樂觀はできないけれど、自分の生まれた国と社会を信じる」と伝えて帰ってきたのです。

帰国してからは、やはり教授の予測が正しくて、しばらく失業していました。米国に戻るべきかと何度も考えましたが、自分の学んだことを日本の社会に還元しなくては、という強い思いでふんばって来ました。そこまで頑張ったのは、ひよっとすると、高校の教室で交わした先生との心の密約があったからかもしれない、ふとそう感じることもありますね（笑）。